

ダークな乙女ゲーム世界で命を狙われています4

イベント1 天空寮

ついに、来てしまった。

目の前の白亜の建物を見上げ、あたしは溜息を吐いた。

天空寮——それは、月下騎士を支える親衛隊のみが入ることを許される特別な女子寮だ。なんのことかと思われるかもしれない。

あたしの通う私立裏戸学園高等部は、セレブな子女が通うことで有名な全寮制の学校だ。そしてそこには、月下騎士会と呼ばれる生徒会組織を頂点とした階級が存在している。

階級は全部で四つ。上から月下騎士、親衛隊、貴族、市民だ。

最上位の生徒である月下騎士と彼らの許婚で構成される親衛隊はこの学園では多くの権限を持つ。なんと月下騎士会には、教員の人事権すらあるのだ。

そんな漫画みたいな、と思った人は惜しい。ゲームみたいな設定というのが正解。

この世界はダーク要素満載の乙女ゲーム『吸血鬼†ホリック』の世界であり、裏戸学園はその舞台なのだ。

あたしがそれに気がついたのは今年の四月、転校生の聖利音と出会った時だ。『吸血鬼†ホリック』

ク』のヒロインである彼女を見た瞬間、あたしはこのゲームをプレイしたことがあるのを思い出した。

タイトルからわかるように、この世界には吸血鬼が存在する。ゲームの主要人物のほとんどは吸血鬼であり、あたしが通う学園は吸血鬼によって運営されているのだ。

けれども、そんなぶつとんだ設定よりもさらに重要なことがあった。

それは主人公のルームメイトが死ぬ運命にあるということ。

そのルームメイトの名前は多岐環——あたしだ。

ゲームのストーリーに従って、死ぬなんて冗談じゃない。

かくして、ゲームの登場人物たちにかかわらないよう、逃げまわる日々がはじまった。

しかし、ヒロインの聖さんに懐かれたために、なかなかうまくいかない。避けるどころか、攻略対象たちとも知り合いになってしまう始末。

そのうえ今度は、月下騎士が自由に出入りする天空寮に転寮するはめになるなんて……

あたしは再び溜息を吐いて、目の前の建物を睨む。

天空寮は、あたしにその威容を見せつけるかのごとくそびえ立っている。

繰り返しになるが、この寮は親衛隊が住む寮である。あたしのような市民が住む寮ではない。

全寮制の裏戸学園は、生徒の階級によって住む寮が違う。

寮は階級順に、月影寮、天空寮、泰光寮、智星寮となる。

あたしは当然、智星寮に住んでいた。

それなのにどうして天空寮に越してくるようになったのか。

それは、智星寮であたしと同室だった聖さんが、天空寮に引越すことになったからだ。

二学期がはじまる直前の今、聖さんが天空寮に転寮するのはゲームのシナリオ通りだ。

あたしは彼女の移動に巻きこまれたのだろう。

けれど、親衛隊でもないあたしを転寮させる理由はどうなっているのか？

普通では考えられないような事態に、怖くなる。

どうしても寮に入る気になれず、あたしは立ちすくんでいた。

「もう、環ちゃん。いつになったら入ってくるの？」

いつの間にか聖さんが不満そうな顔を玄関扉から覗かせている。

「あれ？ 聖さん。そんなところで何を……？」

「この時間に来るって聞いたから待ってたのに、なかなか入ってこないんだもの！」

ほうほう、貴女のことだから、あたしを待ちきれなくて玄関まで出てきてしまったのですね。

よく見れば、彼女はクラッカーを握っている。

それをあたしに向けて発砲ですか……危ないよ！

頬を膨らませている聖さんの後ろから、ややハスキーな声が響いた。

「利音、先走っちゃだめじゃないか」

天空寮の住人である真田希だ。

美人だがボーイッシュな印象の彼女は紅原円^{べいはらまるか}という月下騎士の許婚^{いいなかけ}である。

月下騎士会会計の紅原は、当然、吸血鬼で聖さんの攻略対象。比較的フレンドリーな性格で、あたしにも親切にしてくれていた。もっとも、その優しさが聖さん目当てのものだったことは、一学期の途中で、彼があたしの存在をすっぱり忘れさったことで証明されたが……

紅原が、ヒロインである聖さんのことを忘れてしまうイベントは、ゲームシナリオに登場する。しかし、モブを忘れるなどという設定はない。きっと覚えていないくらい、あたしはどうでもいい存在だったのであろう。

そんな薄情な婚約者に比べて、真田さんはさっぱりとした性格で、あたしにも友好的に接してくれる。

「いらつしやい、多岐さん。いや、これからはお帰りなのかな」

真田さんは嬉しそうだが、あたしは喜べない。

あたしの表情から不満を読みとった彼女が苦笑いを浮かべた。

「そんな顔しないでよ。ここに来ることを望んでなかったのは知っている」

彼女の言う通り、あたしはここに来たくなかった。

天空寮は学園の女子の憧れ^{あこが}だ。だから、ここに住むと多くの女子から嫉妬^{しつと}を買うことになる。

目立つことや厄介なことが嫌いなあたしにとっては、その点からも迷惑な話だった。

しかし、もう決まったことには逆らえない。

「とりあえず荷物を片づけないとだね。多岐さんには、利音と同じ部屋を使ってもらおう。案内する

からついてきて」

予想通り、ここでも聖さんと同室だ。

溜息^{ためいき}を吐^つきながら、真田さんの先導に従って二階に上がる。

天空寮の部屋は廊下を挟んで両側に並んでいた。真田さんの部屋の斜め向かいにある部屋の鍵を開けて中に入る。

ここを聖さんと二人で使うことになるのだ。あたしは、部屋を見回した。

その部屋は二人部屋で、手前が八畳ほどの共用リビング、奥がトイレとバスルームになっている。

さらに個室が二つ、ついていた。

個室の中には小さな勉強机とベッドが置かれていて、扉には鍵がかかるようだ。

智星寮では聖さんの構って攻撃に辟易^{へきえき}していたので、鍵つきの一人部屋は地味に嬉しい。

聖さんには自分の部屋に戻ってもらい、一人で個室を探索していると、真田さんが入ってきた。

「そういえば多岐さん、体調はもう大丈夫なの？」

「え、大丈夫だけど、なんで？」

「いや、学園に帰ってきて早々倒れたって聞いたから」

たしかにあたしは夏合宿後、熱を出して倒れた。

でもあれは、体調不良のせいというより、精神的なものだからなあ。

ゲームの通りならば、二学期から聖さんは天空寮に入る。ここまで生き残れば、『ヒロインのルームメイト』という死亡フラグの条件から逃れられる。

そう思いこんでいたあたしは、夏休みの勉強合宿から智星寮に戻ってきた途端、天空寮への転寮通達を渡された。それを見て、シヨックでひっくり返ってしまったのだ。

あたしのゲームに関する記憶の中に多岐環は、ほとんど登場しない。だから死因がはっきりしないのだ。何が自分の死の引きがねになるかわからず、ひたすらゲームキャラクターとの接触を避けようと努力している。

それなのに、どうしていつまで経っても、あたしは聖さんから離れられないのだろう。

エンディングを思いかえしても、多岐環がここまで必要なキャラクターとは思えない。

物語の冒頭で死んで、ダークな雰囲気盛りあげるだけの役どころだ。どうあがいても、ゲームはあたしを殺したいのか？

あたしの顔は曇る。それを真田さんが心配してくれた。

「……ごめん、多岐さん。もしかして合宿中に誘拐された時のことを思い出させちゃった？」

「え、いや違うよ。これは、その……」

「無理しないでいいよ。誘拐されて、気づいたら水の中だったなんて恐怖だね。しかも、まだ犯人わかってないし」

実は、あたしは夏休み中に行われた、学園主催の勉強合宿中に誘拐された。実行犯が黄土統瑠なのはわかってるが、その時のことは何も覚えていないことにしている。

なぜなら、聖さんの攻略対象である統瑠は月下騎士会書記の吸血鬼。その彼に、あたしが吸血鬼の存在を知っていることを勘づかれてしまったからだ。

吸血鬼は、人間側に存在を隠したがっている。彼らの存在を知っている人間がいるとばらされ、騒動に巻き込まれるのはごめんだ。

「あのさ、多岐さん。怖いことを思い出させて悪いんだけど、ちょっと聞きたいことがあるんだ」改まった口調で真田さんに聞かれる。あたしはなんとなく不安になった。

「何？」

「誘拐されて、泉で溺れていたのを蒼矢会長に助けてもらったって言ってたよね？ 会長は多岐さんとはそれが初対面だって言っていたけど、本当なの？」

月下騎士会会長の蒼矢透もまた、聖さんの攻略対象だ。若手最強の吸血鬼といわれている彼をあたしはかなり警戒している。

真田さんの問いに慎重に答えた。

「言葉を交わしたのはあの時が最初だけど、その前に一度だけ会ったといえば会ったことがあるかな？」

怪訝そうな真田さんに説明した。

「以前、先生に勉強の相談をしている時に、会長が通りかかったことがあって……。なんか、すごく怖そうな人だと思ったから、会話はしなかったんだけど」

「そっか。多岐さんはたまたま出会った会長を見た時から、怖そうだって思ったんだ？」なぜかほっとしたように呟いた真田さんに、あたしは頷く。

「うん。どうしてかは、わからないんだけど……」

嘘です。

あたしと会長との初遭遇^{はつごう}は、四月。親友からもらったキーホルダーを学園の裏庭で探していた時、偶然会長が通りかかった。その時、ずぶ濡れだったあたしを会長はなぜか、幽霊と間違えた。それをいいことに、会長を避けたいあたしは彼の前では幽霊のふりをしていたのだ。

そのうえ会長は、ブルーローズと名乗る女性にあたしが誘拐された時、力を暴走させ、嘔^かみついた血を吸ってきた。以来、それがトラウマになって、あたしは彼を見ると体が震えるようになってる。

合宿中に泉で溺れた時は、さすがに幽霊ではなく多岐環という人間だと会長に認識されてしまったが、幽霊とあたしが同一人物だとは気づかれていない。できれば、この先も会長とはなるべく接触しないでいきたいものだ。

「あ、でもね。あの時、会長に親切にしてもらったおかげか、今はそんなに怖くないんだ」

あたしがフォローすると、真田さんが不満そうな顔になる。

「別に怖いままでもよかったんだけど」

「え、それはどういう意味……?」

「なんでもない。それより、時間をもったいないし、寮を案内するよ」

真田さんの案内で寮の中を見てまわることになった。隣の部屋にいた聖さんも誘う。

生徒の部屋は豪華だが、天空寮の談話室と食堂は智星寮とさほど変わらない。

「食事は食堂でもとれるけど、頼めば部屋に届けてくれるよ」

真田さんのざつくりとした説明を受けながら歩く。食堂の前で聖さんがある通路に目を留めた。

「ねえ、希。あの廊下はどこに繋がっているの?」

聖さんの質問に、真田さんが振りかえる。

「中央棟だよ。その先に月影寮があるんだ」

智星寮の女子棟と違って天空寮は男子の出入りが禁止されていないから驚かないでね、と言われてギョツとした。

ゲームでは、聖さんが攻略対象と天空寮内で会うイベントがあったような気がする。

聖さんとはまた相部屋だし、恋愛イベントが共用リビングで起こったら嫌だなあ。

一通り案内され、最後に食堂でお茶をしようということになった。

智星寮同様、時間外の食堂は寮生に開放されているそう。

開いたままの扉から中に入ると、白いテーブルセットが数個置かれている。

清潔感のある部屋は、天井が高く、天窓から太陽の光が燦々^{さんさん}と注いでいた。

お茶を淹れに行った真田さんを待つこと十分。彼女がお盆を抱えて戻ってきた。

「遅くなって、ごめん。普段この部屋、使わないから、ちよっと手間取っちゃって」

真田さんからカップを受けとりながら、聖さんが首をかしげた。

「ここでご飯食べてるんじゃないの?」

「いや、ここで食事をする人って、いないんだよ」

親衛隊はみんな忙しい。食事の時間もバラバラなので各自の部屋で食べているそうだ。

真田さんも、広い空間に一人なのが耐えられないから、部屋で食事をとっていると言う。

「でも二人が来たし、これからはここで食べることにするよ、二人とも一緒に食べてくれるよね。はい、多岐さん」

真田さんが、あたしに紅茶を差しだす。

礼を言っ受けてった。

琥珀色の水面から漂うよい香りに顔がほころぶ。

「……そうだね。できるだけ食事の時間をあわせるよ」

あたしは真田さんと一緒に食べる約束をした。

「みんなで食事は楽しいしね！ せっかくきれいな食堂だし、使わないともったいないよ」

聖さんも続く。真田さんが嬉しそうに笑った。

だがその和やかな雰囲気は、真田さんが席につき、真面目な顔をしたことで変わる。

「ところでさ、転寮して早々だけど、二人に話しておきたいことがあるんだ」

突然のピリツとした空気に緊張しつつ、あたしは真田さんを見た。

「まず、なんで多岐さんが天空寮に来ることになったのかについてね」

「真田さんは、あたしが天空寮に来ることになった理由を知ってるの？」

いくらゲームの都合とはいえ、そのつじつまを現実世界でどうあわせたのか、気になっていたの、前のめりになる。真田さんは少し気まずげな顔をした。

「智星寮の寮母さんが多岐さんを推薦して、それを理事長が了承したからだよ」

真田さんが言うには、四月以降、ちょこちょこ体調を崩しているあたしを、智星寮の寮母さんはものすごく心配してくれているらしい。

無理ないかもしれない。なにせあたしは、四月にぶつ倒れ、六月にブルーローズに誘拐されたあとは高熱を出して一週間寝こんだ。夏合宿のあとも倒れている。

「天空寮にいれば、万が一また体調が悪くなっても手厚い看護が受けられるからって」

寮母さんは、専属の医者がいる天空寮へあたしを移動できないか、理事長にかけあった。それを理事長が認め、転寮することになったという。

あたしは開いた口が塞がらなかった。

「……天空寮って、そんな理由で入れるところだっけ？」

「さすがに私も変だと思うよ？ でも、親衛隊以外の病気がちな娘が一時的に天空寮で暮らしたことは前にもあって。前例のあることだから通りやすかったって話でさ」

「そんな。あたしの気持ちは尊重してもらえないの？」

「私に言われても……」

たしかに真田さんを責めても意味はない。

寮母さんか——こんなダークホースがいたなんて。

おかげで死亡フラグつきの主人公のルームメイト続行決定だ、ちくしょう！

「でね、ここからが重要なんだよ。君たちは通常の天空寮生と扱いが異なるんだ」

「どういうこと？」

「普通、天空寮生は、みんな親衛隊なんだ。だけど、君たちは親衛隊じゃない。だから、候補という扱いになる」

親衛隊候補生というのは天空寮に住んでいるけれど、親衛隊としての権力を持たない人のことだそうだ。

親衛隊に認められている専用区域への立ち入りや、月下騎士会を手伝う権利などはない。住む場所以外は、一般生徒と変わらない扱いとなるらしい。

その話を聞いて、ふと疑問が浮かんだ。

「ねえ、真田さん。それって聖さんもなの？」

聖さんは月下騎士会の副会長、緑水絆（りょくすいきずな）の親衛隊になるって、六月に彼が智星寮のあたしたちの部屋に訪ねてきた時、副会長自身の口から聞いたと記憶していたのだが。

「そうだよ」

なんということだ。親衛隊候補生になるということは、聖さんはいまだに誰の親衛隊になるのか、決めていないということだ。あれほど、副会長に自分の親衛隊になるように言われていたのに、拒否したのか！

だとしたら、彼女は今、誰と一番親しいのだろうか？

どうしてこういう状況になっているのかは不明だが、無理強（むりじ）いて選ばせることはできないし、ちよūdどあたしの転寮も決まったので、候補生ということに落ち着いたそうだ。

「でも、これには期限があつて、候補生でいられるのは年末までなんだ」

「その間に決めなかったら、環ちゃんと智星寮に戻れるの？」

聖さんが期待を込めた視線を真田さんに送る。しかし、彼女は首を横に振った。

「利音が親衛隊になるのはもう決定事項なんだよ。誰の親衛隊になるのかを決める期間に猶予（ゆうよ）が与えられたにすぎない」

「え？　じゃあ環ちゃんは……」

「多岐さんは、年末まで体調をみて恙（つつが）なく学園に通えろと判断されれば智星寮に戻される。君と多岐さんとは、ここに來た理由がぜんぜん違う」

体調に問題がある場合は、休学を勧められるそうだ。

休学になったら家計が心配だ。今まで以上に体に気をつけようとあたしは心に誓った。

「何それ、ひどい！　環ちゃんが戻るなら、あたしも戻る！」

駄々（だだ）をこねはじめた聖さんを真田さんは困った様子でなだめる。しかし、聖さんは納得しない。

ここは一度お開きにしようと思田さんが提案した。あたしがそれに賛成し立ちあがったので、解散になる。

食堂を出ようとした時、真田さんに呼び止められた。

声が小さかったためか、聖さんはそれに気づかず、そのまま食堂を出ていく。あたしは真田さんのそばに近寄った。

「あのさ。さっき多岐さんは年末まで天空寮にいられるって言ったけれど。あれは最長でってことなんだ」

「……どうということ？」

どうやら、あたしは聖さんが親衛隊になり次第、体調に関係なく智星寮に戻れるらしい。理由を聞こうとした時、あたしたちがついてきていないことに気がついた聖さんに声をかけられ、話が中断した。

真田さんは、「利音には内緒ね」と言って、離れていく。

たしかに聖さんが知ったら、あたしと一緒にいたいから誰の親衛隊にもならない、とか言いだしかねない。

気になるところはあるものの、早く智星寮に戻れるかもしれないというのは、朗報である。

聖さんをさっさと誰かの親衛隊にしよう。

あたしの今後の目標がはっきり定まった。



明けて、翌朝。

本日は二学期の始業式だ。相変わらず朝に弱い聖さんを叩き起こし、朝食のため食堂に向かう。他に利用者のいない食堂はガランとしている。

真田さんは学校に用事があるということで、すでに寮にいなかった。

天空寮の食堂はビュッフェ形式ではなく、個別のお盆の上に一人分がとりわけてある。

それを受けとり、窓際のテーブルで食事をはじめた。向かいの席では聖さんが仏頂面（ぶつどうめん）でパンを睨（にら）んでいる。

「……聖さん、いつまでむくれてるの？」

しつこいことに聖さんは昨日の怒りをまだ引きずっているのだ。

「だって、ひどいじゃない。環ちゃんだけ、智星寮に戻らなければいけないとか」

「別にひどくないよ。そもそも、あたしが今ここにいること自体がおかしいんだし」

「納得できない！」

不満そうに聖さんはトーストにかじりつく。あたしは何も言う気になれなかった。

しばし食事をする音だけが食堂に響く。

食事も終わりがけた頃、聖さんが突然、手を打った。

「あ、そうか！ 環ちゃんが親衛隊になれば、問題はないわけだね」

あたしは飲もうとしていたコーヒを噴きだしそうになる。

「ごほっ……えっと、聖さん？」

「あゝ、でも環ちゃんに恋人できるの嫌だなあ。偽装で誰かに頼む？」

「いやいやいや、偽装って」

「環ちゃん、月下騎士会の中に気になる人いないの？」

聞かれて、一瞬、ある男子の顔を思い出しかけてしまった。あたしはそれを慌てて打ち消す。

「ヒロイン相手に言えるわけがないでしょう？」

「ヒロイン？」

「あ、いや、なんでもない。それよりさ、聖さんこそどうなの？」

「え、あたし？」

今あたしにとつて重要なのは、彼女の攻略対象に対する好感度だ。

この世界が乙女ゲームの世界であるかぎり、ヒーローを選ぶ権利はヒロインにある。

彼女が現在狙っているのは誰なのか。それによって、今後の動きを変える必要があった。

「聖さんこそ、この学園で気になる人はいないの？」

少し前のめりになって聞くと、聖さんは眉をひそめた。それでも一応、考える素振りは見せる。

かすかな唸り声のあと、中空に視線を彷徨わせたまま彼女はポツリと呟いた。

「……強いて言うなら、円くんかな？」

え？ 紅原って。いつの間に、彼とそんな仲になっていたのだろう。

そういえば前に二人で下校するところを見かけたことがあったつけ。

二人の仲睦まじげな様子を思い出していると、聖さんは突然拳をぐっと握りしめた。

「円くん、甘いものを奢ってくれるって約束したのに、まだ果たしてくれないんだよ」

以前、聖さんとの待ち合わせに遅刻した紅原は、その詫びに奢ると言ったそうだ。それなのに連絡がない、と彼女は憤慨する。

「環ちゃんも一緒に行こうね。利子として環ちゃんの分も奢ってもらうから」

あたしは頭を抱えた。

「えっと、ね。聖さん。気になるって、そういう意味じゃなくて……」

すると聖さんは少し困った顔になる。

「……もしかして恋愛って意味で？」

「わかってて、ごまかしたの？」

「別にそんなつもりはないよ。ただ好きっていう気持ちは、よくわからないから」

どんなふうに感じれば恋なのか、と聞かれて困惑する。

……あたしに聞くか、それを？

「環ちゃんは恋ってしたことある？」

「えっと、ないけど……」

「なぐんの話してるの？」

突然背後から伸びてきた手が、デザートのオレンジを一切れ奪った。

勝手にあたしのオレンジを食べたのは、統溜だ。彼は、寝ている翔瑠を背負っている。

翔瑠は統溜の兄で、月下騎士会庶務。彼も聖さんの攻略対象だ。

ここは女子寮だが、月下騎士は出入り自由だと真田さんが言っていたのを思い出す。

統溜は、翔瑠をあたしの隣の席に座らせ、自分もその隣にちゃっかり収まった。

「で、なんの話？」

「あのね、恋ってどんなふうに感じるものなのかなって……」

「朝からずいぶん面白い話してるんだね」

「朝からずいぶん面白い話してるんだね」

「統溜くんは経験ある？ 恋するってどんな感じなのかな？」

「さあ、どうだろうねえ」

はぐらかすように笑う統溜に、聖さんは少し不満そうだ。

その隣からボツリとした呟つぶやきが聞こえた。

「……ずっとその人のことが頭から離れない」

寝ているとばかり思っていた翔溜が言った。驚いて横を向くと、思いがけず彼と目ががち合う。

まるであたしをずっと見ていたようなタイミングのよさに、ドキリとする。

「……遠くにいてもすぐに見つけられるし、ずっとそばにいたいな、って思う」

「そ、それって、翔溜くん、今、恋をしてるってこと？」

聖さんが頬を染めて聞いたけど、翔溜は首をことんと傾け、曖昧あいまいに笑う。

聖さんは興奮して「他には？」と聞いている。翔溜はそれにも答える気はないらしく、再び目を閉じてしまった。

統溜が兄の顔を面白そうに眺め、代わりに話しはじめる。

「個人的には好きな娘むすめって、いじめたくなるね」

「え？ 好きなのに？」

「だっていじめたら、僕のことを考えるようになるでしょ」

周りが引いていることなどお構いなしに、統溜は持論を展開する。

「それにいろんな表情が見たい、というのもあるかも。でも、僕以外の人がいじめるのは嫌だよ」

別の誰かがその娘を傷つけたら、その人を殺しちゃうかも、と統溜は明るく笑う。

聖さんもさすがにドン引きしていた。

「か、過激だね」

「まあ、極端だとは思うけどね」

統溜の笑みに薄ら寒いものを感じていた時、食堂の入口から声がした。

「あなたたち、まだ、食堂にいたんですか？」

その声にみんなが視線を向ける。そこには、緑水副会長が立っていた。

聖さんを登校の誘いにきたのだろうか。

副会長はゆつたりとした足取りでこちらに近づいてくる。

あたしたちは、それぞれ彼に挨拶あいさつした。

「おはようございます。利音、なんの話をしていたんですか？」

「おはようございます、絆先輩。恋についてです」

「こい……ですか？ なぜ朝から淡水魚の話を……」

「……鯉こいじゃないし」

定番のボケに翔溜が小さく突っこみ、統溜がニヤニヤと笑う。

「緑先輩、恋愛のほうだって。利音ちゃんが恋するかどうかという気持ちになるかわからないって言うから、みんなで教えてあげてたの」

からかうような統溜の視線に気づいたのか、副会長が不快そうに眉根を寄せた。

「なんですか、それは。朝からそのような話題を……」

「ごめんなさい。どうしても知りたかったんです」

「え？ ……あ、いや、別に朝からして悪い話題ではないですが」

慌てて聖さんが謝ると、副会長があっさり意見を翻す。相変わらずヒロインには大甘である。

「絆先輩は、恋をしたことってありますか？」

「っ、それは、……ありますけど」

あなたにと続きそうな勢いで、副会長は顔を赤くしている。だが、鈍感ヒロインは気づかない。

「参考までに、その人を目の前にしたらどう感じるか、教えてもらえませんか？」

無邪気に尋ねるヒロインは罪深い。

副会長は珍しく歯切れ悪く「あの、その」とか言っている。

しかし副会長は、意を決したように聖さんをまっすぐ見た。

「俺は……。その、相手に触りたいという気持ちが湧きます」

……朝っぱらから何言ってるんでしょかね、副会長は。

だが、聖さんは興味津々といった感じで、先を促す。

「触りたいって、どこを？」

「すべて。それに触ってもほしい。キスはするのめされるのめ嫌じゃない気がします」

副会長にしては大胆な発言に、聖さんが頬を染める。

「キ、キスって……」

「好きな人が目の前にいれば、そういう気持ちが湧くということですよ」

「……そこまで先輩に想われるなんて、その人、少し羨ましいかもしれないですね」

「っ、それって……」

副会長が、ごくんと唾を呑む。

「聖さん、そろそろ靴取りにいかないと遅れるよ」

「え、もうそんな時間？」

声をかけた瞬間、聖さんがパッとあたしを見た。

すでにテーブルから離れていたあたしに彼女が駆けよってくる。

お盆を返却口に返し、聖さんと一緒に食堂を出る途中、統溜の小声が耳に入った。

「環ちゃんって、案外、命知らずなんだね」

面白がっている雰囲気はつきり伝わる。

放つとけ。実際には、ものすごく怖かったわ。

今だって副会長からどす黒いオーラを感じて、背後を振りかえれない。

でも、見すごせなかったんだよ。

だってあきらかに二人の世界だったじゃん。あのままにしてたら告白シーンになりそうだった。

二人が付き合えば、すぐに智星寮に帰れるかな、とは思ったけど。緑水副会長ルートは人死にが出やすいのだ。巻きこまれて死ぬ可能性を考えると、聖さんには彼を選んでほしくない。

自室に戻り登校の準備をしながら、誰のルートがいいかを考える。

すぐに紅原の顔が思い浮かんだ。

紅原のルートは彼の心の問題が中心になって進むので、誰かが傷ついたり死んだりする展開がほとんどない。陰惨なストーリーの多い『吸血鬼＋ホリック』にしては比較的穏やかで平和なシナリオだ。

紅原はあたしをからかったり意地悪することはあるけれど、恋人には一途で優しい人だ。

考えれば考えるほど、優良物件である。俄然、聖さんと彼をくつつけるべきだ。

でも、なぜだろう。あたしは聖さんに彼を薦める気にはなれなかった。

それどころか、聖さんが紅原のことを「気にする」のが恋愛感情ゆえではなかったことにほっとしている。

これからの展開を考えるなら、無理やりにも二人をくつつけるべきなのに、どうして？

「……環ちゃん？ どうしたの、ぼっとして」

聖さんに声をかけられて、準備ができていたことを思い出した。

時計を見ると、そろそろ出ないと遅刻しそうな時間だ。

あたしは聖さんになんでもないと答え、連れだって部屋を出たのだった。



二学期がはじまってから三日経った。

あたしの転寮を面白く思っていない女子生徒から何か嫌がらせをされるかもしれないと身構えていたが、驚くほど何事もない。拍子抜けするくらい平和な日々が続いている。

クラスメイトから視線を感じることはあつたが、態度は概ね一学期と変わらない。

夏休みが明けたら、いきなり同じクラスの生徒が二人も天空寮に移動してましたなんて、普通は気になるものじゃないだろうか。

質問攻めにあう覚悟だったのに、反応が全くないというのは変だと思う。

「そりゃ異常だよ。みんな、聞きたいのを必死で我慢してるんだから」

そう教えてくれたのはクラスメイトの波留間だった。

彼はクラスメイトの中では珍しく、学園最下層の身分である奨学生にあたしにも友好的な人物だ。用事もないのに時おりこうして話しかけてくる。

たいていはあたしと聖さんが揃っていると寄ってくるのだが、現在はあたし一人。聖さんは、お花摘みに行っていた。

波留間は少し困った顔で話を続ける。

「月下騎士会から学園の生徒全員に、二人の転寮について余計な詮索をしないように、メールで注意があつたんだよ」

このクラスの間には特に厳格なルールが課され、違反者にはキツイ罰が設けられているそうだ。それで、クラスメイトはあたしたちとの距離を測りかねて、遠巻きにしているらしい。

「それなのに波留間くんは話しかけてきたってわけ？」

「そんな、お礼なんていいよ。話しかけるのは友だちとして当然じゃない」

恩着せがましい波留間に呆れるが、彼のおかげでクラスメイトの態度に納得できた。

「ところで、利音は遅いね」

大丈夫かな、と彼が呟くので首をかしげる。

「大丈夫って何が？」

「いや、一応注意はされてるけど、それを守らない人種っているんじゃない？ 転寮の理由を無理やり聞きだすために誰かに責められているかもしれないと思って」

言われてみれば、たしかにそうだ。

あたしはゲームの中にそんなイベントがあつたのを思い出した。

天空寮に移動した主人公がやつかみを受けて複数の女子生徒に囲まれているところを攻略対象が助けるという、あるある展開だ。

本来のゲームでは、聖さんはこのイベントまでに攻略対象の個別ルートに入っている。だからヒロインを助けにくるのが誰なのかプレイヤーにはわかってるんだけど、いまだにあたしは聖さんの攻略状況を把握できていない。

もし、このイベントが起きるとしたら、誰が現れるのだろうか？

なんだか、そわそわしてきた。

これは聖さんの攻略状況を見極めるいい機会だ。決して野次馬根性ではない。

じっとしていられず、あたしは波留間に聖さんの様子を見てくると伝えて、教室を出る。

教室から離れた階段下のトイレの前で、聖さんはあっさり見つかった。

教室近くのトイレが混みあっていて、こちらまで来たため遅くなっていたらしい。

イベントが起きていなかったのにはがっかりしたが、平穏なのはいいことだ。

あたしが聖さんと二人で教室に戻ろうとした時だった。

「あなた方は……多岐様と聖様？」

聞き覚えのない声がする。過去の経験から嫌な予感しかしない。

あたしはとっさに「違います。人違いです」と答え、聖さんの腕を掴んで逃げようとした。

しかし、二人の女子生徒に行く手を阻まれる。

あたしたちの背後でおほほ、とさきほどの声の主が笑った。

「そのような嘘を吐かないでくださいませな」

振り向いた先にいたのは、緩やかに巻いた髪にカチューシャをつけた女子生徒だ。扇子で口元を覆っている。

その顔に覚えはない。

制服の学年章から上級生だとわかるが、それだけだ。

「少々おかしいことがありますが。よろしいですわよね」

拒否権はないとばかりの言葉に、隣の聖さんがムツとした。

「ちよっと、失礼じゃないですか？ 突然呼び止めて名乗りもせず、質問するなんて」

「あらあら、私を知らないのですか？」

上級生は大きさに嘆き、目を細めて口を扇子で隠す。あたしはそんな彼女にげんなりした。この学校の生徒って本当に自意識過剰だよなあ。誰もが自分を知っているなんてどうやって思えるのだろう。

上級生はわずかに眉をひそめて、東上と名乗った。

「質問をさせていただけますね。あなた方はどなたの親衛隊になったのですか？」

眉を下げる聖さんを見ながら、あたしは嘆息した。

「あの、あたしたち、どの親衛隊に所属しているか人に教えてはいけないことになっているんです」

真田さんから、そう答えるように言い含められている。

「あら、そんな他人行儀な。私たちの仲じゃありませんか」

さきほどまで名前も知らなかったのに、どんな仲だと問いたいが、我慢する。

それにしても、まずい状況だ。今は昼休みの終わりに近く、ほとんどの生徒が教室に戻っており、助けを求めようにも周囲に人がいない。

「本当に言えないんですよ。もう授業がはじまりますし、先輩方も教室に帰ったほうがいいのでは？」

「ならば、余計に早く答えてくれなくては。授業にも遅れずにすむのですから、それが最善だと思いますのよ」

東上先輩たちが引いてくれそうにないので、いつそ強行突破すべきか、と考える。

けれど、ヘタに行動して、あとで文句をつけられるのは面倒だ。

どうすれば穩便にお引きとりいただけるのかと悩んでいると、東上先輩が持っていた扇子をパチリと鳴らした。

「……あまり立場を笠に着るようなことを言いたくはないのですが、私たちは蒼矢会長ファンクラブの幹部ですの」

当然知ってるわよね、とばかりに胸を張られるが、ぶっちゃけファンクラブに興味がないので、幹部の顔など覚えていない。

黙っているあたしたちに東上先輩たちは月下騎士会ファンクラブの総代表として、会いにきたのだと言った。

芝居がかった仕草で再び扇子を広げ、先輩はあたしたちを睨む。

「率直に言わせていただきます。立場をはっきりさせるおつもりがないのであれば、月下騎士会の方々にあまり馴れ馴れしくなさいませんよう」

理不尽な注意に、あたしは眉根を寄せる。

「そんなことを言われましたも。別にこちらから近づいているわけでは……」

「そういう問題ではありません」

あたしの言葉は東上先輩にピシヤリと遮られた。

「よろしいですか、お二方。親衛隊の方は、基本ファンクラブからは脱退される。これはご存じですわよね？」

月下騎士に選ばれ親衛隊になるということは、彼と将来を誓いあったことを意味する。それなのに他の男のファンクラブに所属していると、尻軽な印象を持たれ、外聞が悪い。だから親衛隊は、自分の婚約者以外の月下騎士にはむやみに近づかない。現に学園内で紅原以外の月下騎士と真田さんが一緒にいるところを見かけたことはなかった。「各ファンクラブは正直、困惑しています。多岐様も聖様も月下騎士のどなたと契り^{ちぎ}を結ばれたのか全くわかりません」

追従するべきか、苦言を呈^{てい}するか図りかねているのだ、と言う。

聖さんがふくと膨^{ふく}れた。

「なんで、そんなことをあなたたちに指図されなきゃいけないんですか。みんなとお友だちで、仲がいいってだけで、誰にも迷惑をかけてないのに」

「そう思っているのは聖様だけですわよ」

じろりと睨^{にら}む女子生徒の目には苛^{いら}立ちが見える。

彼女たちにとって月下騎士は憧^{あこが}れの的^{まと}。焦^こがれてやまない人たちを前に、ファンクラブの会則を守って、己の気持ちを必死で抑えているのだ。聖さんの行動はそんな彼女たちの神経を逆撫^{さか}でする行為に違いない。

「とにかく、この場ではつきりさせていただかないかぎり、教室には帰せませんわ」

「そんな、横暴^{おうぼう}だわ!」

「学園の秩序^{ちつじょ}のためです」

東上先輩はきつぱりと聖さんの非難を撥^はねつけて、あたしを睨^{にら}んだ。

「それに多岐様、あなたがまだ親衛隊になっていらつしやらないのなら、今もファンクラブの会員であるはずですよ。そのあなたが、幹部である私に隠し事などしていいと思いませんか?」

たしかにあたしは蒼矢会長のファンクラブに所属している。しかし、答えられないものは答えられない。ちなみにファンクラブに入っているからといって、別にあたしが会長を好きだというわけではない。そうしないと学園内では暮らしにくいから、月下騎士全員のファンクラブに入っているだけだ。

それはともかく、東上先輩の様子だと午後の授業がはじまっても、解放してくれるとは思えなかった。

やっぱり強行突破するしかないかと思いはじめた時――

「たかが、ファンクラブの幹部にどれほどの権威があるというのでしょうか?」

突然パサッと髪を跳ねあげる音と共に、声が響いた。それまで余裕の顔をしていた東上先輩が体を強張^{おぼ}らせる。

いや、東上先輩だけではない。他の二人の上級生たちも青ざめた。あたしの顔からも血の気が引く。

緊迫した雰囲気の中、聖さんだけが場の空気をもともしない。

「あなたは……暮^{くれ}先輩、でしたっけ?」

「聖さん、あなた、本当に相愛^{あい}ならずですわね?」

蒼矢会長の親衛隊である暮先先輩が階段の上からあたしたちを睥睨する。
「ごきげんよう、皆様」

階段をゆっくり下りてくる暮先先輩は優雅だ。けれど、あたしは半端ない威圧感を覚えた。それは彼女が女吸血鬼だからだろうか。

階段を下りきり、暮先先輩が東上先輩の前に立った。東上先輩は可哀想なほど青くなっている。格の違いが露わで、なんだか哀れだ。

「こんなはじめとした場所で一体、何をなさっているのかしら？」

「それは……」

あたしたちを囲んでいた上級生の一人は口ごもり、もう一人は震えている。気丈にも、東上先輩が一步前に出た。

「暮先様は聖様たちを庇われるのですか」

反発されるとは思っていなかったのだろう、暮先先輩が眉をひそめた。

「庇う？ 冗談じゃありませんわ。なぜ聖さんなどを」

たしかに、暮先先輩が聖さんを助ける理由はない。

「ですが……いつの間に月下騎士会と親衛隊の権威はここまで落ちてしまったのでしょうか」
嘆かわしいこと、と溜息を吐く暮先先輩は本当にきれいだ。きれいすぎて怖い。

上級生の一人が恐る恐る尋ねた。

「あの、暮先様、それはどういう……」

「あなた、アタクシがいつ発言を許しましたか？」

「ふええ……も、申し訳ありません！」

スライディング土下座でもしそうな勢いで上級生が頭を下げる。

暮先先輩はつまらなさそうに鼻を鳴らすと、おもむろに東上先輩の手から扇子を奪った。

そして、それを反転させ東上先輩の鼻先に突きつける。

「あなた、名前はなんとおっしゃったかしら」

「え？ あの、私は暮先様とは何度もお話を……ひつ」

暮先先輩は東上先輩の口を扇子で塞ぎ、彼女の頬をペシペシと叩く。

「アタクシは名前を聞いているのよ。他の言葉は要らなくてよ」

薄く笑う暮先先輩はあきらかに人を脅し慣れている。声も出せないでいる東上先輩を一瞥し、周囲に視線を向けた。

聖さん以外の生徒が体をビクツとすくませる。

「よろしいかしら？ アタクシはあなた方がその二人に何をしようが別にどうでもいいのです」

暮先先輩は、広げた扇子で口元を隠しながら目を閉じ、溜息を吐いた。そして、目を開くと同時に、周囲に鋭い視線を走らせる。

「アタクシが問題にしているのはあなた方が月下騎士会の権威を傷つけたことです」

「え？ そんなことをした覚えは……」

「本当にわからないんです。そのような悪いお頭で、よく裏戸学園に入れましたわねえ」

暮先先輩に嘲笑され、上級生はカッと顔を赤くした。

「この二人のことは詮索無用と、月下騎士会から通達されているはずですよ」

「それは……」

「聞いていなかったなんて言い訳は通じませんわよ？ 聞いてないこと自体があなた方の落ち度ですもの」

ファンクラブの幹部たちは顔を見合わせている。

「わかったら、二度とこのようなことのないよう、みんなに言って聞かせなさい。それが本来のファンクラブ幹部の役目でしてよ？」

さもなくば、と暮先先輩は自分の首の前で扇子を真一文字に走らせた。

東上先輩たちが声にならない悲鳴を上げたような気がする。

暮先先輩から扇子を受けとり、東上先輩はふらふらと去っていく。他の上級生も彼女に続いた。完全敗北といった感じの後ろ姿を見送っていると、隣からパチパチと音がした。

聖さんがキラキラした目で暮先先輩を見上げ、拍手している。その視線に暮先先輩はひるんだ。

「な、聖さん。なんですよ、その目は」

「すぐぐかつこよかった。あの、これから愛理香先輩って呼んでもいいですか？」

……さすがだな、聖さん。暮先先輩を絶句させるなんて。

転校初日に暮先先輩に脅されたことなど完全に忘れて、本気で感銘を受けているようだ。

「突然なんですよ？ 一体、何を企んで……」

「そんな、企むなんて。愛理香先輩の勇姿に感動したんです！」

聖さんが力説すると、見る間に暮先先輩が赤くなる。

「ちよつと、やめなさい！ アタクシを辱めたいの？」

「恥ずかしいことなんてありませんよ！ さっきの愛理香先輩は凛々しくて、きれいでかつこよくて、とにかく最高……」

「……!! ええい、少しお黙りなさい！」

褒めちぎる聖さんに耐えられなくなつたのか、暮先先輩が彼女の額をペシリと叩いた。

小気味いい音がして、ようやく聖さんが止まる。

「ひどい。愛理香先輩」

恨みがましげに額を押さえる聖さんを暮先先輩は鋭く睨む。

「ひどいのはあなたの態度ですわ。子どもではないのですから、落ち着きなさい！」

強い視線で論され、聖さんは「はあい」と頷く。

暮先先輩は深い溜息を吐いた。

「これが同じ天空寮生だなんて情けない。アタクシ、恥ずかしくて出歩けなくなりそうよ。真田にまともな教育を期待するのは間違いだつたようすわね」

あなたですわよ、と暮先先輩のダメ出しがあたしにも飛んできた。

「多岐さん。あなた、以前アタクシが言ったことを全く理解してなかったようすわね」

それは、あれか？

聖さんの転校初日、蒼矢会長に近づいたとして、暮先先輩とその取り巻きはあたしと聖さんを取り囲んで責めた。紅原が助けてくれたが、暮先先輩が去り際に残した台詞がたしか……

「ルームメイトの教育をしつかりなさいとあれほと言いましたのに」
睨まれて、あたしはブンブン首を横に振った。

「……その、やるだけはやってますけど、聖さんが聞いてくれなくて……」

「言い訳など聞きたくありませんわ。あの時は、あなたたちが天空寮に来るとは思っていませんでしたから忠告ですませました。けれど、これからはそうはまいません」

天空寮生は学園の生徒の憧れの存在であるため、常に言動には気をつけなければならないそうだ。理不尽の権化のように思っていた人が案外、学園のことをきちんと想っていたことにあたしは驚いた。

「……なんですか。その顔は」

「愛理香様がまともなことを言ってるので面食らっているんじゃないですか？」

暮先先輩の背後からひよつこりと女子生徒が顔を出す。

その娘はあきらかに脱色した明るい色の髪をサイドテールにしていた。学年章を確認すると、同学年のようだ。

しかし、裏戸学園には珍しい派手なギャルメイクのその顔に見覚えはない。

「南出。それはアタクシに喧嘩を売っているのかしら」

「とんでもございません。ただ、制裁バージョンしか知らない人が、本当の愛理香様の姿を見て驚

くのは無理ないのでは？」

暮先先輩は自らが南出と呼んだ少女を睨んだ。

しかし、その娘は睨まれてもニコニコと笑ったまま。暮先先輩は諦めたように溜息を吐くと、踵を返した。

「そろそろ予鈴が鳴りますわ。アタクシは教室に戻らせていただきます」

え？ もう帰るの？

暮先先輩のあつさりとした態度に困惑していた時、隣から声がした。

「愛理香様の行動が不可解って顔してるね」

「え。あれ？ あの、南出さん、だっけ？ 暮先先輩についていなくてもいいの？」

「いや、だって愛理香様とは学年違うし。同じクラスのよしみで一緒に教室に行こうじゃない」
同じクラスというのはどういうことだ？

あたしは今までこんなに目立つ人がクラスにいることに気づかなかったのか。

聖さんを見ると、彼女は首を横に振った。

「何、言ってるの？ あなたは、うちのクラスじゃないじゃない」

「今まではね。私は転校生だから」

「転校生って、二学期がはじまってもう三日も経ってるけど」

「いや、実は二学期の頭から転入してるんだけど、質の悪い夏風邪引いちゃってさ」

「普通、朝のホームルームとかで紹介されるんじゃないの？」

「寝過ごしちゃってね。昼から行くって連絡はしたから、問題ないでしょ」

問題ないわけがないと思うのだが。南出さんの態度に聖さんは呆れている。

「もう、どうでもいいよ。それより教室に行こうよ」

都合のいいことに、次の授業は担任の柵橋先生（柵橋はし）の授業なので、そこで紹介してもらえばいいと聖さんは言う。南出さんは「そうだ、そうだ！」と全く悪びれない。

「私、南出清夏（きよか）。これからよろしくね」

につこりと笑われる。モヤツとしながらも、あたしたちは南出さんと教室に向かったのだった。



南出さんと一緒に教室に戻ると、もう柵橋先生が来ていた。

先生はあたしと聖さんを席に促し、みんなに南出さんを紹介したあと、授業を開始する。

それにしても春に聖さんが来たというのに、また転入生がうちのクラスに入るなんてびっくりだ。一学期の終わりに転校した娘（むすめ）がいたから人数の関係なんだろうけど、人の出入りがめまぐるしい。そんなことを考えていると、いつの間にか授業が終わっていた。

南出さんを見れば、人に囲まれている。

細かいことを気にしないおおらかさと人なつっこい性格ゆえか、南出さんはクラスにすんなり溶けこめたようだ。

彼女は数人の女子たちと連れだつて教室を出ていこうとしている。

その時、聞き覚えのある音が聞こえた。

見ると、南出さんが鍵を拾っている。鍵には紫の紐（ひも）で鈴が結わえつけられていた。さっき聞いたのは、この鈴の音だろう。

あたしはその鈴に見覚えがあった。驚いて思わず声を上げる。

「え？ それは、小室（こむろ）さんに……？」

その瞬間、南出さんが勢いよく顔を上げた。彼女と目が合う。

女子のグループが南出さんと呼ぶが、彼女は「ごめん、先に行つて」と断り、あたしに近づいてきた。

「嫌だな。多岐さん、わかつちゃった？」

あたしは目を見開く。

「……もしかして、南出さんって小室さんなの？」

「そうだよ、久しぶりだね」

そう言いながら笑う彼女は、あたしの記憶にある小室さんの姿と全く結びつかない。

一年生の一学期だけいた、あたしのルームメイト。その娘（むすめ）が小室さんだ。

彼女はあたしに負けず劣らず地味な容姿の人で、いつも長い前髪で顔を隠していた。全く、どんな変わりようだ。

「ああ、でも多岐さんにバレるとか、超ショック。昔のイケてない私と変わっていないってことだ



よね」

「あ、いや。見た目では完璧にわからなかったよ。ただ、その鈴が……」

南出さんの鍵についた鈴は、寮の鍵を失くした小室さんに、あたしが貸したものだ。鈴がついていれば鍵を落とした時に音で気づくことができるから、と。

「鈴？ あ、これ？ そういえばこれって多岐さんに貰ったやつだったつけ。便利に使わせてもらってるよ」

いや、あげたつもりはないんだけど。

そのあと、彼女が急に転校したため、返してもらうタイミングを逸したただけだ。なんだか返せとも、言いだしづらく、仕方ないので別の疑問を口にした。

「ねえ、小室さんはどうして……」

「ごめん、多岐さん、もうその名前と呼ばないでくれる？」

名字が変わったということは、何か言いたくない事情があるのかもしれない。あたしは謝罪して、聞き直す。

「南出さんは、どうして裏戸学園に戻ってこられたの？」

小室さんは蒼矢会長を追いかけていたのを暮先先輩に見咎められて、学園を追放されたはずだ。

「それに、なんで昼休みに暮先先輩といたの？ 仲よさそうに見えたけど」

「いろいろ、誤解があるのよ」

南出さんは、蒼矢会長につきまとうたことを暮最先輩に注意されたのは本当だが、転校したのは家庭の事情だったと説明した。

「蒼矢先輩に近づいたのは、ちょっとした好奇心だったんだ。あんな美形がいたら気になるじゃない？」

家の都合で転校が決まっていた彼女は思い出に、とまたま一人でいた会長に声をかけた。それを暮最先輩に見つかって、怒られたそうだが、先輩に平謝りして、すぐに学園からいなくなるかと許してもらったという。

「ん？ ちょっと待って。それじゃ、南出さんが転校したあと、ルームメイトの連帯責任だとか言って、あたしが暮最先輩たちに怒られたのはなんだったの？」

「それは……」

南出さんは気まずげに視線を逸らしたあと、突然こちらに向かって合掌する。

「ごめん！ それって、私のせい！」

「いや、それはそうだろうけど」

「多分、愛理香様は、多岐さんを見せしめにしたの」

南出さんが言うには、暮最先輩は裏戸学園をとつても愛しており、その秩序を守ることに日々心血を注いでいるようだ。彼女は常に生徒の動向に目を光らせ、規則を破りそうな生徒の前では偽悪的に振る舞う。自分が恐怖の対象になることで秩序を維持しようとしているらしい。

あたしが南出さんの行動の責任をとられたのは、蒼矢会長につきまとう存在を暮最先輩が不快

に思ったからというだけではないらしい。先輩はルームメイトの行動を互に見張り、はしたない行動を抑制するように促したかったのだろうと、南出さんは言った。

たしかに昼休みの暮最先輩は妙に芝居がかって東上先輩を脅していた。

「……何それ。あたし、全然関係ないのに。めちゃくちゃ怖かったんだけど」

「本当にごめんなさい。言い訳にもならないけど、そんなことになっているなんて全然知らなかったのよ」

「……もう、いいよ。過去のことだし、今さら蒸し返しても何も変わらないもの」

納得はいかないが、この学園は理不尽な出来事だらけだ。

それに実は悪いことばかりではなかった。

最下層の身分だとされる奨学生のあたしを受けていた細々とした嫌がらせが、暮最先輩たちにいじめられて以降、減ったのだ。

どうも暮最先輩に睨まれたことで、あたしの存在は禁忌になったらしい。一般生徒はおろか、嫌がらせをしていた連中も、あたしを遠巻きにするようになった。

「あのさ、そんな話のあとでずうずうしいけど、今後はルームメイト改め、クラスメイトとしてよろしくしてくれる？」

気まずそうに、南出さんは手を差しだした。あたしはその手を見つめる。いろいろ言いたいことはあるけれど、彼女に悪意があったわけではない。

あたしがその手を握りかえすと、南出さんはほっとしたようだ。

その表情はかつての彼女とは、やはり重ならない。

「……南出さん、変わったね」

「いや、まあ、以前の自分を思い出すと恥ずかしいかぎりです。せつかく戻ってきたから、少しは変わるうと思つて。高校デビューのやり直してね」

「……少しどころじゃないよ」

「多岐さんも変わったね」

「え？ あたし？」

「こう言っちゃなんだけど、独りが好きな人だと思つてた。周りと溶けこみそうにないつていうか」

聖さんみたいな人と仲よくなつてゐると思わなかつたと言われて、慚然とする。

「それは、聖さんが纏わりついてくるから」

「その割に、楽しそうだったけど」

たしかに昔に比べれば学校自体を楽しいと感じるようになってゐる。それは間違ひなく聖さんのおかげだ。だけど、その分迷惑もかけられてゐるので、素直に領けなかつた。

イベント2 動揺

「他に意見はないかな？」

南出さんのその声で、ハッと目が覚める。

ああ、やばい。ホームルームなのをいいことに、寝てた。

幸い、あたしは後ろの席なので、船を漕いでいたことはクラスメイトに知られてゐないようだ。

ぼんやり顔を上げると、南出さんが黒板に何か書いている。そういえば、南出さんがクラスの副委員長になつたんだつて。

転校してゐた娘が副委員長だったので、誰かがやらなければいけなかつたのだ。とはいえ、転入してきて間もない南出さんになるとは――

かつてのおとなしい彼女を知るあたしには驚きである。

だが、南出さんはあたしが思つてゐたよりずっと人をまとめる才能があつたようだ。

まだ転校してきて一週間しか経つてゐないのに、今や彼女はクラスの中心人物と言つても過言ではない。

彼女のおかげか、クラスも一学期より活気がある気がする。

今だって、来月下旬に迫つた文化祭の出し物が面白くないと南出さんが言いだしたので、みんな

で再検討している最中である。一学期はみんなやる気がなくて、前副委員長が無理やりひねりだしたジャズ喫茶——レコードをかけて市販のお茶とお菓子を出すだけの喫茶店をやるという話だったのに。

まるで別のクラスのように。

チャリと正面の黒板を見れば、「メイド」や「ペットカフェ」などの文字がある。

大嫌いな猫に触らなければいけなくなるかもしれないペットカフェだけは、絶対阻止しなければ！

それにしても……

出されている案を見てあたしは眉をひそめた。

転校していった女の子が主体として動いていた元の計画に、多少の見直しが必要なのは認める。けれど、時間がないのに、前より凝った準備が必要な案ばかりなのはどうかだろう。

準備にかかる時間や、衣装や教室を飾りつける手間を考えているのか。

不安になって周りを見回すと、南出さんがクラス委員長の平戸琢磨に声をかけていた。

変わったといえば、この人も変わったよね。

彼の雰囲気はあきらかに一学期と違っている。

一学期は優しくて真面目な優等生といった感じだったのに、今の彼はどこか近づきたい雰囲気醸しだしている。

よく談笑していた男子の一人とも距離を置いているみたいだ。

一体、夏休みの間に何があったのだろう、とクラスの話題になっている。

しかし、夏休み中の委員長の行動を知る術は、あたしにはない。

——いや、一つだけあるか。

あたしは昨夜受けとったメールを思い出した。

この学園では、生徒一人ひとりにメールアドレスを発行している。あたしは携帯を持っていないが、寮内や学内に設置された共用パソコンからメールを見ることができる。

とはいえ、あたしにメールしてくる人はほばいない。だからほとんど確認していないんだけど——

たまたま一昨日寮内のパソコンでメールを確認すると、見知らぬアドレスから一通のメールが届いていた。

その内容は、相談したいことがあるから会えないか、というもの。送り主の欄には霧島大翔と打たれていた。

あたしは視線を動かし、前のほうに座る霧島くんの後ろ姿を見る。

小柄な彼は特に発言することもなく、隅の席におとなしく座っている。

最近になって知ったのだが、彼は委員長のルームメイトだそうなの。
霧島くんはあたしに親切的な、数少ない生徒の一人だった。その彼が、委員長とルームメイトだなんて、なんだか因縁めいていて嫌な気分になる。

なぜなら、委員長は聖さんの攻略対象の一人だからだ。攻略対象唯一の人間で、吸血鬼ハンター

でもある委員長。単なる偶然なんだろうが、妙に気になった。

そんな霧島くんが、あたしに相談したいことってなんだろう。

どうして、あたし？ 相談する相手が他にいなかった？

でもこれは、いい機会かもしれない。

今まであたしはゲームの登場人物と距離を置くことで、死亡フラグを回避しようと考えていた。

しかしその結果、何度も死にそうな目にあっている。その方針が正しいとは思えなくなっていた。

今後はむしろ、積極的に彼らの動向を探り、危険の芽を早期に潰したい。

霧島くんから委員長の変貌の理由を聞きだし、危険があるようなら、早めに対処したかった。

霧島くんと約束は今日の放課後。

メールには、相談内容は会って話すと書いてあった。何を言われるのかと胸に不安が広がる。

あたしは、文化祭の出し物を相談するクラスメイトたちの声を聞きながら、はやる気持ちを抑えた。

そして、いよいよ霧島くんと約束した放課後である。

待ち合わせ場所は、あたしが指定した智星寮の通信室だ。

霧島くん自身は悪い人ではないけれど、だからといって無警戒でホイホイ人と会うのは危険だった。

通信室なら、目の前に寮母室がある。

すぐに助けが呼べるけれど、あまり人が来ないので密談には最適なのだ。

放課後、行きかう生徒が少なくなつてから、智星寮に向かう。

人目に触れないよう気を使いながら、寮の前までたどりついた。時計を見ると、約束の時間までまだ余裕がある。

このまま通信室で霧島くんを待ってもよかったのだが、あたしは少し寄り道することにした。

智星寮の玄関を避けて建物の壁沿いを歩くと、寮の裏口が見えてくる。

ここは昔、近くにある広場に行くための出入口だった。しかし、いつの頃からか広場に行く人がいなくなり、出入口自体も使われなくなったのだ。

広場のすぐそばにはコンクリート製の手洗い場がある。

あたしは蛇口を回して水が出ることを確かめた。

なんとか使えるようだ。

あたしはスカートをわずかにめくつて膝を見た。そこには擦り傷がある。

学校からの道中、出っ張った木の根に足を取られ、転んでしまったのだ。

さつきまで傷を無視していたのだが、せっかく時間があるし、せめて水洗いだけでもしておこう。

「痛てて……、ああ血が出てる」

手洗い用に作られただけあり、コンクリートの洗い場はやや高い位置に水受けがある。

傷を洗うには、水受けに足を上げるしかない。

面倒なので靴と靴下は脱がず、スカートを軽くたくしあげて水受けに足を上げようとした時

だった。

「こんなところで、何やってるの？」

「っ、……ぎゃっ！」

突然声をかけられて、上げかけた足の膝をコンクリートに打ちつけた。傷口に当たり、あまりの痛みにその場にしゃがみこむ。

うう、痛い。

半分涙目になっていると、頭上に影が差した。

「何やってるの？」

膝を抱えて蹲るあたしに、呆れた様子で声をかけてきたのは委員長だ。なんでこの人がここに現れるのか。

疑問を口にする前に、委員長があたしの怪我に気づいた。

「怪我してるの？」

言外に「ドン臭い」と言われているようで、少し恥ずかしくなる。

「転んだの？　ちよっとそこに座りなよ」

そう言って委員長は問答無用であたしを手洗い場の縁に腰かけさせた。

何をするかと思えば、ポケットからハンカチを取りだして、手洗い場の水で湿らせる。そして水を軽くきったあと、委員長は跪いてあたしの膝にハンカチを当てた。

「っ……！」

「少し沁みるけど、我慢してよ」

そういうことは、ハンカチを当てる前に言っただけ。

でも、手当てしてくれているのはわかってるので、あたしはじつと耐える。

委員長は手慣れた様子で、傷口の血と泥を拭ってくれた。

「全く、何やってるんだよ。手洗い場に足を上げるなんて」

「すみません、そうですよね。考えてみれば、手洗い場に足を上げるのはマナー違反でした」

「そうじゃなくて、スカートなんだから、もう少し気を使えってことだよ」

「でも、人いなかったですし」

「僕がいただろう？」

「いや、まあそうですけど」

そんなに目くじらを立てるようなことだろうか。

たしかにスカートはたくしあげたが、中が見えるほど足を上げたつもりはない。不快なものを見せられたと怒っているのだろうか。だとしたら、理不尽だ。

気に食わなければ、放置して黙って去ればいいのに。

「不満げだね。僕の言うこと理解してる？」

「……わかってますよ」

不快なものを見せたと謝罪するのは悔しい。

「わかっているように見えないんだけど？」

委員長が唐突に顔を寄せてきた。

驚いて身を引くが、手洗い場の背に体が当たる。

委員長は手洗い場に手をつけて、あたしを囲いこんだ。

「い、委員長？ ああ……」

なんなのだろう、この体勢。

「あ、さ、大翔になんの用？」

一瞬、誰のことを言われているのかわからず、きょとんとしてしまった。

「霧島大翔のことだよ」

ああ、霧島くんのことか。そういえば、そんな名前だった……

なんで、委員長はあたしが霧島くんと会うことを知っているのだろう。

驚いて尋ねる。

「な、なんでそれを」

「やっぱりか。今日は、大翔がやけにそわそわしていると思ったら……」

「もしかしてカマをかけたんですか？」

ひどいと思っていたら、委員長に「引つかかるほうが悪い」と言われる。

「それはそうですけど」

「で、大翔に近づいて多岐さんは何をする気なの？」

最近様子のおかしいあなたのことが気になって、とは言えない。

黙りこんだあたしに、委員長は皮肉げな視線を向けてきた。

「俺の動きを探るつもりで、とか？」

まるで心を読んだかのような指摘をされ、あたしは思わず息を呑んだ。

すると、委員長がなぜか悲しげな顔をする。

「どうして、そんな素直な反応をするかな……」

「あ、いや、その……」

どう言いつくろったらいいいのか考えるが、焦るあまり、あたしの頭の中は真っ白だ。

「知らないふりしてごまかしてくれば、疑わずにすむのに。君は本当にどうしようもないね」

疑うって!? もしかして、あたしが吸血鬼の存在に気がつき、それが委員長にもばれたのだろうか。

緊張で心音が速まる。

そんなあたしを委員長はじつと見つめていたが、ふいに笑った。

「生憎(あいにく)だけど、大翔は最近の俺のことは何も知らないよ。多岐さんは誰に頼まれてこんなことをしているの？」

「な、なんの話で……」

「……ふうん、しらはくれるんだ」

眼鏡の奥の目を細めた委員長が怖い。

「ねえ、多岐さん。素直に話しなよ。そうすれば、悪いようにはしないし、誰かに脅(おど)されていると

いのなら、俺が助ける。だから……」

「環姉から離れろ！」

突然、聞こえた声に、委員長が飛び退いた。

そして彼の後ろに見えた人の姿に、あたしは目を丸くする。

……あれ、あたし目がおかしくなったのかな？

ここにいるはずのない人物を目にして固まるあたしの耳に、委員長の声が聞こえた。

「邪魔が入ったから、今日はこれ以上何もしない」

委員長を見ると、悲しげな彼の視線にぶつかる。あたしは困惑した。

どうして、委員長はこんな顔をするのだろう。

その表情の意味を尋ねたいが、なんと聞けばいいのかわからない。

「おとなしくしててよ。大翔にも近づかないでくれ。じゃなければ、俺は君を……」

「何を言ってるんだ？」

再び言葉を遮られた委員長は、さっと踵を返す。あたしはその背を呆然と見送ることしかできなかった。

委員長の姿が完全に見えなくなった頃、隣から恐る恐るといった感じの声をかけられる。

「……環姉？ あいつ誰？ 紅原以外のやつにもあんなふうに迫られてるって、どういうこと？」

怪訝そうに聞いてきたのは竜くんだ。けれどあたしの耳に彼の言葉はほとんど入ってこなかった。

藤崎竜輝は、幼馴染の香織の弟である。

藤崎家とは家族ぐるみの付き合いなので、竜くんはあたしにとっても弟のような存在だ。

一つ年下の彼はたしか、地元の公立高校に進学したはず。

なのにどうして、裏戸学園に竜くんがいるの？

「どうして、ここに？」

泣きそうな気分で尋ねると、竜くんはさらりと答えた。

「もちろん、環姉が心配で、転校してきたんだよ」

あたしが心配ただけで、転校してきたんだ？

ここは、ゲームの舞台、裏戸学園の敷地内。

『吸血鬼＋ホリック』に藤崎竜輝なんてキャラクター、出てこないのに。

あたしのせいで、こんな死亡フラグだらけのゲームにかかわろうというのか。

「なんてことを……」

あたしの反応は竜くんが期待したものと違ったらしく、彼は不満げだ。

「なあ、クラスのやつから聞いたぞ。この学園のやつらの環姉に対する扱い。なんで言ってくれなかつたんだよ」

言ってくれたらもつと前に助けにきたのに、と竜くんは歯噛みしている。

「まあ、いい。でもこれからは俺がちゃんと環姉を守って……」

「……そんなこと、できるわけがないじゃない」

あたしの拒絶に、竜くんがきよんとした。